日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第146号　2023年3月

〈座談会〉

丸山優先生からの伝言

語　り：丸　山　　優

聞き手：原　田　忠　直
　　片　山　善　博
　　川　村　潤　子

【インタビュー公表までの経緯】

丸山優先生の人生において，聞き手である私たち3人は，それほど重要な存在ではない．少なくとも私たちの言葉が，先生の知的好奇心を揺さぶるようなことはなかっただろうし，ドラマティックな出来事を共有しているわけではない．ましてや研究をともにしたこともない．それゆえ，先生の目には，少々好奇心が強く，悪く言えば随分と図々しい後輩と映っていたと思う．実際，病魔に侵されている身であると知りながら，何度もご自宅に上がり込んだ．その上，ウニのスパゲティ，ハマグリのリゾットなどの手料理が食べたいと，リクエストばかりしていたのだから，厚かましさの極みのような存在だったに違いない．さらに，「あと10年は生きる」と宣言していた先生に対して，言葉を残したいからといって，居間のテーブルの上にボイスレコーダーを置いたことは，人の道から外れるような行為であったと自覚もしている．しかし，後悔はしていない．上手く表現できないが，先生の言葉には，物事の真理に突き進んでいく力，あるいは私たちの考えをひっくり返すような力が秘められていた．語らいのなかで，「なるほど」と膝を叩き，突然，視野が広がっていく感覚を幾度も味わった．間違いなく，先生の言葉は私たちにとって宝物である．それゆえ，たとえその一部であったとしても，公開したくない気持ちがないといえば嘘になる．さらに，先生も「お前たちだけが聞けばいい」と思っていただろうし，そのほうが，先生の美学には合致していると理解もしている．それでも，今回，インタビューの内容を公表する理由は，主に次のような点にある．

一つ目の理由は，2021年度の卒業式で，インタビューの一部を文字化し，先生からの贈る言葉として紹介した．その内容は，本編の最後に，川村に語ったハイデガーの投企についてである．学生には少々難しいかと思ったが，式場は静まり返り，誰もが熱心に耳を傾けていた．学生たちが，先生の言葉を求める姿に感動を覚えるとともに，先生の言葉を必要とするのは私たちだ

けではないことに気づかされた．

二つ目は，卒業式の後，インタビューのなかから社会福祉に関する見解，ヴェーバー，ハイデガー，アガンベンなどの哲学的な話を中心に，改めて文字起こしを行い，御家族，先生を慕っていた方々に配った．反響は小さくなかった．なかでも，実弟であり，日本福祉大学の理事長である丸山悟氏と本編の内容に基づいて座談会を行い，議論を重ねるようになった．さらに，いつしか私たち以外の有志も参加する勉強会へと発展している．先生が残した言葉は，新しい動きを生み出している．まさに「死諸葛走生仲達」である．こうした動きをさらに広げるため，インタビューの内容を公表しなければならないという思いが強くなった．

三つ目は，本編のなかで語られているように，インタビュー当時，先生は，3 本の論文を同時に執筆されていた．しかし，それらはすべて未完のまま残された．このうち，完成度のもっとも高い「ヴェーバーとハイデガー　――脱魔術化の行き着く果ての「再魔術化」からの脱却――」は，『経済論集』（第 56 号）に遺稿論文として掲載した．ただし，いくつかの節が抜け落ちているため，なかなか全体像を掴み取ることは難しい．ところが，本編において先生が語るヴェーバー，ハイデガー，アガンベンについての解釈を読むと，完璧とはいえないが，論文の意図が浮かび上がってくる．また，本編で展開される主と奴の弁証法のくだりを受けて，先生は，「ちょっと書き直そう」と発言するのだが，その部分がどこなのか，あるいは，書き直しの作業のなかで，いくつかの節をあえて白紙に戻したのではないかなどと想像は膨らむ．実に，刺激的な時間を楽しむことができるのだが，それだけではない．本編と遺稿論文を繋ぎ合わせていくと，先生が行間から語り始める．目の前に現れてくる．先生と再会したいと思う人は，決して私たち 3 人だけではないだろう．この不思議な感覚を多くの人に味わっていただきたいと願っている．

以上 3 点は，本編を公表する理由であるが，もとより先生の言葉の録音を始めてから，わずか 2 か月後に召されるとは想像もしていなかった．もっと多くの言葉を蓄積することができると信じていた．しかし，私たちの手元に残ったのは，わずか 15 時間程度の記録に過ぎない．インタビューは，2021 年 11 月 1 日と 13 日，12 月 6 日の 3 回にわたって実施した．このうち，本編では 11 月 1 日と 13 日に収録した内容を掲載する．なお，インタビューの 1 回目の聞き手は原田と川村，2 回目は片山，原田，川村の 3 人で行った．

【11 月 1 日のインタビュー】

原田：丸山先生，本日はよろしくお願いします．まずは，長く教鞭をとられた日本福祉大学の歴史，この大学で社会福祉という学問がどのように位置付けられ，どのような展開を遂げたのか，問題点を含め，先生のお考えをお話しください．

丸山：日本福祉大学は，日蓮宗を本山としている法音寺が，1953 年，中部社会事業短期大学として始まるわけだよ．1957 年に 4 年生大学として日本福祉大学になって，私立大学として初め

て設立された福祉の大学だよ．これをどう評価するかというのが，第一のポイントなんだけど，設立当初の象徴的な存在が，浅賀ふささんだよ．この人は半田市の造り酒屋の小栗家の出身で，日本初の民間のパイロットになった兄についてアメリカに渡るんだよ．ただ，浅賀さんは，アメリカで兄と一緒に行動をともにしなくて，大学院まで進んで社会福祉学を学ぶんだよ．卒業後は，アメリカでソーシャルワーカーとして働いて，その後，日本に戻ってきて，医療ソーシャルワーカーとして働くわけよ．厚生省の役人でもあったんだよ．そんな彼女を引き抜いて，短大を作るんだよ．つまり，日本福祉大学は，初の民間の４年生の大学というだけではなく，社会事業家，社会事業者，ソーシャルワーカーを養成するためのアメリカナイズされた大学として出発するわけよ．日本の社会福祉事業や社会保障事業はヨーロッパモデルが中心だったんだけど，それに対して日本福祉大学はアメリカモデルなんだよ．これが一つの特色なんだ．浅賀さんは，このアメリカモデルの象徴的な存在だったんだよ．要するにアメリカナイズされた，日本では風変わりな大学だったんだよ．だから，社会政策中心のものではなくて対人援助を中心としていたんだよ．ただ，問題はここから始まるんだ．茫洋として分からないんだよ．アメリカナイズされたと言ってもよく良く分からないんだよ．

原田：アメリカナイズですか・・・．浅賀さんの経歴を聞けば，そうなんでしょうけど，彼女以外の教員もナイズされていたのですか？というか，当時，どのような教員が教壇に立っていたのですか？

丸山：もちろん，公衆衛生とか，予防学とか，社会医学の分野，さらに，医療ケースワーカーだった人もいたよ．ただ，多くは，いろんな活動家を集めるんだよ．たとえば肺結核の患者団体の職員とか．児島美都子さんとかね．後に，愛知１区で当選する田中美智子とかね．彼女は家庭裁判所出身なんだよ．そのほか，セツルメントやっている人を集め，または，保育の現場で働いていた人とかね．いわゆる社会福祉学を勉強した人はいないわけよ．浅賀さんを除いてはね．みんな手探りで，実践系で，事務職員でもあったような人たちを集めたんだよ．

原田：まさに社会の最前線で実践していた人たちですね．

丸山：狙いとしてはアメリカ的なソーシャルワーカーの学生をたくさん養成するための大学だったんだよ．ソーシャルワーカーを養成する大学を明確に掲げていたんだよ．ただ専門性がないだろう．浅賀さんを除けばね．要するにごった煮だよね．ごった煮というのは，自信がないというのもあるわけだし，変な印象になるんだけど．僕らは最後まで理解できなかったんだけど，当時，学生と共同研究してるという意識が強いんだよ．学生の位置づけが全然違うんだよ．研究者として位置付けてるんだよ．だから，学内学会をやるんだ．卒業生は，実践に入ったら，そこで出てきた問題意識を学問にするための媒体として位置付けられていたね．さらに，学生が共同の

研究者として位置付けられる背景には，職域の広がりがあるんだよ．例えば，ラグビー部の初期メンバーの卒業生も日本赤十字に努めているんだ．だから，就職先で新しい研究課題を作ってくるという感じだね．その他にも，公務員になっていくしね．

原田：学生が卒業して，それぞれの現場に入っていって，現場の問題点を学内学会で発表して，それをみんなでどうするかを考えているわけですね．この点は日本福祉大学の一つの方向性が生まれた感じですね．

丸山：さらに，一つの契機になったのは，伊勢湾台風の時に，ボートを用意してさ，救済にあたるというのを全学規模でやるんだよ．その後，住民のなかに溶け込んでいくわけよ．さらに，全国型大学になっていく転機にもなってるわけ．全国型になればなるほど福祉大学の評価が上がる．福祉大に行きたいっていう学生がどんどん増えていく．そういう好循環が生まれてくるんだよ．そこでさらに，浅賀さんが活躍するんだよ．どういう具合に活躍するかというと，彼女はもともとアメリカナイズされたソーシャルワーカーだから経済学とかを使うのは当たり前なんだよ．だから社会政策に対してものを言い出さなければ人じゃないと言い出すんだよ．

原田：それは，対人援助の限界を感じ取っていたからなんですか？

丸山：いやいや．もっと広がるものだと最初から考えていたんだよ．社会政策を推進する中心になっていくわけだよ．本来は精神科学が専門だよ．精神科学研究所の初代所長も務めていたんだから．

原田：当時の日本社会であれば，問題は山積していて，最前線で働く卒業生から上がってくる情報に対して対処方法を考えるなかで，社会政策を提案したいという流れは，理解できなくはないですけど．

丸山：そこに 1970 年代に革新の嵐が吹いてくるんだよ．1973 年に革新共闘で田中美智子が衆議院議員に当選するんだよ．その翌年には本山さんが名古屋市長に当選して 3 期連続で務めるんだよ．そうなった時に，いってみれば空間的に飛び越えちゃったんだよ．日本福祉大学は，民間大学としての健全性を失うんだよ．社会政策にものを言う大学になるんだよ．革新の嵐というのはさ，本山市政を例にすればさ，浅賀さんたちと一緒になって，敬老パスっていうのを作るんだよ．収入に関係なく 65 歳以上を対象にして無料パスを配布するんだよ．敬老パスは名古屋市が日本で初めて採用されたんだよ．それに，浅賀さんを含め日本福祉大学の影響があったということなんだよ．

原田：無料といっても財政的な負担はあるわけだから，経済的にいえば愚策ですよね．

丸山：そうなんだよ．

原田：しかし，好し悪しは別として，当時，大学と政治は近かったんですね．

丸山：それは良くないんだよ．日本福祉大学は，ソーシャルワーカーを育てるとして出発したアメリカモデルになったのはそこまではいい．だけど社会政策で抜き出てしまう．政策をつくる実行力があるって言われると，のぼせ上がっちゃうじゃない．だから，異次元の空間ができてるんだけど，それを本人たちは異次元だと思わないんだよね．大学闘争の後だし余計にね．ソーシャル自治なんてさ，今から言えば恥ずかしい話だよ．

原田：でも，日本福祉大学は，物言う大学として，さらに全国区になっていくわけでしょう．名古屋に日本福祉大学ありということになるわけですよね．

丸山：そうなんだけど．そこで社会福祉学は精神科学ではなく，社会科学であると定義するんだよ．社会福祉科学研究所って名前を変えるんだよ．社会福祉学すなわち社会科学としての社会福祉学となるんだよ．そうすると経済は，それをさらに支える社会科学として，福祉を理解する経済人の要請というふうに位置づけられていくんだよ．最悪のパターンだよ．

原田：なるほど．しかし，精神科学からの転換に対して，浅賀さんは，自己矛盾を感じなかったのですか？

丸山：いや，彼女の場合は幸福に結合するんだよ．精神科学をやっていて，社会政策も発言できれば，怖いものなしじゃないか．

原田：それは浅賀さんだけではなく，当時，さまざまな現場で働いていた人びとも同様に幸せに結合していくわけですね．

丸山：そう．そういう人たちが社会政策的にも発言力を持ってしまうから，幸福の結合が起こるんだよ．福祉政策が出来れば，我が意を得たりということだよ．皆やりたいようにできるんだから．

原田：なるほど．ニッチなところに入っていって，しかも権力を持ち政策もできるならば幸福ですね．とくに，研究者としては，自分が考えていたものが政策として具現化され，卒業生から

入ってくる問題を政策に反映させていけば，幸せだし，善い社会が実現すると思うわけですね．でも，さっきも言いましたけど，その幸福感に疑問というか，矛盾なようなものを感じなかったのですかね．

丸山：矛盾なんて誰も思っていない．浅賀さんは非常に幸せな人生を歩むんだけど，残された側はきついよね．社会福祉は社会科学であると言われたら，今までやってきたことは半分以上，意味がなくなるんだから．

原田：意味がなくなるとは？

丸山：対人ケアを研究しなくなるじゃない．精神科学研究科が社会科学研究科に代わるんだよ．これが曲者だったんだよ．そもそも学生は社会政策にあまり興味ないでしょう．

原田：そうですね．社会福祉を学びたいと希望する学生は，心の優しい学生が多いけど，それは，家庭のなかで，対人的な経験を通して喜びを感じたことがある学生が少なくないからだと思います．お互いに幸せになれる社会を作りたいという希望みたいなものを抱いていると思います．

丸山：学生はそれを望むんだけど，社会政策を学ぶことが中心になると違和感が増すよね．

原田：確かに．日本福祉大学に入って，政治家になるのかって話ですね．

丸山：社会福祉学部はあの時に解体した．

原田：それは美浜に来てからですか？

丸山：いや名古屋にいた時から．

原田：でも，そこからも二転三転するのかなと思うんだけど．

丸山：いや全然そこは変わらない．

原田：例えば社会福祉士を取得することが強調されるようになるじゃないですか．

丸山：資格を取ったからといって，名称を独占できるだけで経済的な報酬があまり変わるわけじゃない．だから，ソーシャルワーカーを目指すって言ってるのはいいんだけど，事実上，社会

福祉士の資格を取ることによって何か変わるのかってことだよ．何も変わらないだろ．そこが混迷だよ．日本福祉大学は，何を目指してるんだっていわれたら，何もわからない．要するに政府の政策が変われば柔軟に対処していくしかない．

原田：しかし，将来，政策が変更されて，社会福祉士の位置づけが下がるようなことも有りうるということですね．そんな状況が生まれたら，簡単に対処することはできなくなるんじゃないかな．もっとも，未来に対して漠然とした不安について，今，考えても仕方ないけど・・・．ただ，話しを戻すと，日本福祉大学は政治家を出した事が一つの終着点ということなんですね．それ以来，混迷しているというか，現実社会からズレてしまっているということですね．言い換えれば，自分たちの政策を作れる時があって，それは幸せだった．しかし，もうそれはできない．だから，保守政権による政策に対して，とくに反発するわけではなく，それを実行に移せるような社会福祉士を作っていくことしかできなくなる．それに，新たに政治家を輩出しようとしても，政策を実現するために保守から出るんですかっていわれそうですね．それ以上に，保守の政治家を出したら日本福祉大学の存在意義はなくなります．先生のいわれる混迷とは，かなり深刻ですね．どうすれば，いいんですか．

丸山：精神科学に傾斜するしかないでしょう．社会政策オンリーで行くなんてありえないし，ましてやそれが主流なんてありえない．対人ケアを中心にその方法論を磨いていくしかないんじゃない．さもなければ，単なる介護労働者を作ってるだけの大学になってしまうでしょう．

原田：なるほど．介護労働者とか，ゲートキーパー的な人材を日本福祉大学が養成することを中心に据えることはないということですね．

丸山：そう．そこなんだよ．そのためにも，社会福祉学＝社会科学というところから絶縁しなければいけない．人文科学に戻らなければいけない．

原田：そこが肝ですね．社会科学から人文科学に戻れということですね．

丸山：教養もそれにとってふさわしく革新されなければいけない．演劇とか文学とかみんな排除してきたんだよ．

原田：芸術もなくなったしね．杉本先生とかね．

丸山：杉本先生のような芸術を学ぶことが，日本福祉大学の良さだったんだよ．もちろん，経済は社会科学として徹底していけばいいんだけども，社会福祉学はそれに追随してはいけない．

原田：なるほど．人文ですね．社会福祉学を社会科学的にアプローチするのは経済学部が担えば十分でしょう．たとえば，厚生経済学とか，経済史とか．社会科学研究所は，そもそも経済学者が担うべき領域だと思います．

丸山：そうなんだよ．社会福祉学には，歴史，芸術とかを教えることが非常に重要なんだよ．ゲートキーパーだけ養成するような大学に人は集まらないわな．

原田：なるほど．人文科学と社会科学の違いはどこですか？もう少し具体的に教えてください．

丸山：分析と解釈の差だよ．分析するのは社会科学．複雑な問題を簡単に見せるのが社会科学だよ．逆に，不合理なものを理解すること，解釈が中心になるよね．たとえば，心理学とか経済学は分析が中心だよね．解釈するのは社会学と文学だよね．意味理解だよ．両方勉強すればいいに決まっているんだけど，どちらに力点を置くのかってことをしっかり言ったほうがいい．

原田：対人ケアとは人文科学を学ぶことが大事ですね．不合理や不条理が，お互いのなかに存在しているなかで，どのように向き合っていくことかを考えることが，まさに人文科学ですね．そこを社会科学にしてしまったことが一つの分岐点ですね．分析にしても出てこない答えが重要だということですね．

丸山：つまり，人文科学を学んだ方が，社会福祉士の合格率は上がると思うよ．理解力を高めることになるからね．

原田：それに，卒業してからの活躍の度合いがまったく違うでしょうね．分析する力よりも人文科学的に他者が，何を考え，どのような状況に置かれているかをしっかり理解して，他者の前に立って，自分は他者にとってどういう意味のある存在であるかを考え抜いていかないと，対人ケアはできないでしょう．

丸山：芸術だってひとつのコミュニケーションの手段として考えればすごいよね．そういうこと全然やらないわけだよ．

原田：確かにね．描いている本人は分かっていると思うけど，たとえば，杉本先生の絵を前にしても，なかなか理解できないからね．もちろん，あれこれ考えることは面白いことだけど．

丸山：僕は良く分かるよ．暗い時代っていう時に紺碧の碧を使うんだけど，彼の場合はそうだと思うな．暗いというのは暗黒の暗さじゃなくて，碧の暗さなんだよ．あの人のテーマは碧と青だ

ね．

原田：なるほど．でも，最近，杉本先生について一つわかったことがある．杉本先生は，明るい色と暗い色を使うけど，大きい絵は暗くなって，小さい絵は，すごく鮮やかな色で描かれている．どうして違うのってきいたら，「僕の心のなかは，このくらいしか明るくないんだ」って言ってた．なんとなくだけど，杉本先生を少し理解できた気になった．

丸山：美術館を巡るのは好きなんだけど，一番衝撃を受けたのはダリだよ．ガーンとなったよ．みんなはさ，ダリの漫画チックなところが好きなのかもしれないけど，色がすごいんだよ．スペインでダリを見たときは絵の具が違うね．その時，娘連れてたんだけど，ダリの前で立ち止まってさ，不思議な絵だなあと見てたら，「お父さんこれどうやって見たらいいの」って言われてさ，自分が感じた通りのままで見ればいいんだよ．出したい色が重要なんだよ．その色が自分のものでしかないから，客体が持ってるものではないから．そこをしっかり理解することが重要なんだよ．髭が丸くなってるところはどうでもいいんだよ．ヨーロッパへ行けば行くほど色彩感覚が重要になってくるね．

原田：私が，衝撃を受けたのは，もう30年以上前のことだけど，トビリシでピロスマニの絵を前にした時，腰が抜けそうになった．あの衝撃は今でも覚えてます．マルタでカラバッジョを観たときも衝撃を受けたけど，ピロスマニには及ばなかった．ただ，どうして自分が感動したのか，よく分からないんですけどね．でも，あれこれ考え続けることは，実に楽しいですね．まさに意味理解の作業です．そんなことばかりにエネルギーを注いでいるから，最近，自分の研究領域である中国経済についても，人文学的アプローチに偏ってる自覚があります．

丸山：それはしょうがない．意味を解釈しようとするとそうなるんだよ．

原田：意味を解釈しないと意味がないというか，解釈なくして分析はあり得ないとも思っているんだけど．

丸山：それを社会学って言うんだよ．だから社会学を中心にして，社会福祉学をもう一度構築すれば，話は別だと思うんだよ．まだ社会福祉学はやれると思う．経済もまだやれると思う．一緒だよね．経済学部にも可能性があると思うよ．数学を教えるようになってから，余計に痛感している．こんなにできない学生がここまでできるかって思うと，拍手だよね．末恐ろしいっていうか，質問の内容が，どんどん変わってきてさ．「先生の方が間違ってませんか」って言われちゃうよ．「計算式が間違っていませんか？」って言われてね．「あっ，本当だ．間違っていたよ」ってね．そういう関係ってさ，授業始めた当初の出来の悪さから考えたらさ，予想もできないもの

だよね．

原田：本当，楽しそうに数学の授業やってましたよね．それに学生も楽しそうだった．一度，先生のクラスに顔出したら，女子学生が先生にお菓子渡していましたね．いい関係だなと思いましたよ．ところで，絵の話をしてたら，ミレーの『落穂拾い』を思い出した．

丸山：なんで浮かぶんだよ．想像できないな．

原田：そう？あの絵には，手前に 3 人の女性がいるでしょう．彼女たちは社会的な弱者という感じで．絵の奥の方には，堆く収穫された麦が描かれているじゃない．彼女たちは，残された麦を拾って，生活の糧にしているわけでしょう．ネタは，旧約聖書だと思うけど，生活の知恵というか，弱者救済のためのお恵みみたいなものが描かれていると思ったんだよね．

丸山：経済史学的にいえばさ，昔の共同体は，みんな落穂ひろいしたんだよ．麦がてんこ盛りになっていようがとは関係なく．共同体の農民であれば，誰が入ってもいい，入会地に近いようなもんだったんだよ．共同体農民の権利があるんだよ．だからさ，権利として理解しちゃってるんだよ．お恵みとは思ってないんだよ．

原田：なるほど．権利として理解しなければいけないということですね．ただ，聖書の書き方とか読んでいると，権利じゃないなっていう感じでしょう．

丸山：そうだな．聖書では権利じゃないな．

原田：聖書のなかでは，お恵みというか，おすそわけじゃないけど，要するに残していったものを取りに戻ってはいけないという教えですからね．

丸山：贈与経済と宮廷経済というのは，前資本主義社会の市場経済として想定するわけな．宮廷経済っていうのは，まず剰余労働をすべて宮廷に集めて放出するんだよ．市場に放出するときに小売商を使ってね．そういう富の再分配というのはあるわけだよ．贈与経済というのはそうじゃなくて，一方的に与えるんだよ．そうすると従者になるしかないんだよ．この二つのパターンが，前近代のパターンなんだよ．市場経済と言っても色々あるけどね．だから，再分配についての質問だと思うんだけど，再分配というのはニューディールで始めて出てくるんだよ．それまでは，アメリカの場合は，弱者救済というのは，障がい者が対象なんだよ．たとえば，精神福祉といっても，アル中に対してどう対処するとか，その全盲の人に対してはどういう教育をやって行くかっていう問題が中心なんだよ．だから，貧しい人ではないんだよ．貧しいとか貧しくないか

らじゃなくて，障がい者対策っていうのはお金かかるんだよね．それをどういうふうにするのかっていうことだよね．病院でもアル中に対して，薬で対処するわけではなくて，精神的にケアしていくっていうことを考えるんだよ．昔の日本福祉大学のなかにも，そういう人たちはいっぱいいたんだよね．アル中対策してるから，お酒大好きだけど対策してる間は一滴も飲まないと．そういう卒業生がいっぱいいたんだよ．職業としてやってるっていう感じだったんだろうな．

原田：そう．むしろミレーの絵に戻ると，あの絵を見て，日本福祉大学は何をするかっていうことなのかなって思ったわけですよ．つまり，3人の女性だけではなく，平たく言って社会的な弱者に対して，何をするのかということを考えるのが，役目ではないかと言いたいわけですよ．

丸山：なるほど．そういう意味ね．再分配といわれると嫌なんだよ．

原田：あの絵をみると，確かに再分配を連想したくなりますけどね．

丸山：貧困問題だと思ったからこそ，経済学部を作って，教員を揃えたんだよ．障がい者問題が中心だと誰も思っていない．対人ケアってそこだろう．

原田：貧困だけじゃないんだよね．

丸山：障がい者問題としての貧困とは，そこに陥る可能性があるかどうかということだ．全盲になったら働けない．教育にも，社会生活にもお金はかかるんだよ．障がい者は3倍も4倍もお金がかかるんだよ．その手当てをどうするかってそれは経済的な計算で再分配だよ．

原田：社会福祉は，貧困かどうかを考えるのではなく，人間として幸せにして生きるにはどうしたらいいのかってことを考えることでしょう．

丸山：そう．ミレーの限界は，救いは宗教にしかないんだよ．宗教が救うんじゃないんだ，と言いたい．

原田：人間が救えるはずということでしょ．

丸山：そうそう．ただ，再分配といわれると，抵抗があるんだな．社会福祉＝社会政策って言われると抵抗があるんだよ．なぜかって言うと貧困に陥るリスクは高いけど貧困とは限らないだろ．貧しいから不幸だとは限らないよな．

原田：そうですね．もう少し絵画繋がりの話をしていいですかね．ドガの『アブサン』という絵があるでしょう．ちょっとおしゃれしてアブサン飲んでる下層労働者が描かれていて，女性の表情から，貧しい生活というか，悲惨さを読み取ることはできなくはないけど，それだけで悲惨だって決めつけられないんじゃないかと思うんですよ．

丸山：ドガは，悲惨さなんか描いてないよ．

原田：ドガは何を描いたの？

丸山：ダメな人間を描いただけだろう．

原田：ダメな男と女を描いたんだ．それが本当に不幸とは結び付かないんだけど．

丸山：不幸だと思ってないよ．ダメなやつはダメっていう風に思ってるだけだよ．人間にはそれぞれの分があるということをドガは思っていたはずだよ．

原田：つまり，そんなオシャレな格好しても似合わないっていうことなのか．冷酷だね．

丸山：「アブサン」を見て，救われると思ってる人がいないわけじゃないよね．裕福な人間がハイキングに出かけて行ってさ，美味しいワインや美味しい食べ物を食べているような絵画を見てさ，19 世紀になれば，喜びもしないよ．それよりも，貧しい人を描いて，「俺は違うぞ」って思わせるような絵画の方が売れるわな．ダメな人間をみてさ，自分自身を評価するわけだよ．つまんないやつを見て，俺の方がよっぽど偉いって言うね，これが合理化だよな．ヴェーバーの合理化って，そういうもんだと思ってるよ．どこまでも勤勉な労働者でいることが救いだっていうのが，ピューリタニズムが言うんだよ．それが資本主義の精神なんだよ．

原田：天職としてね．

丸山：ダメなやつを描くと，それを見て，私は天職に目覚めた．自分は救われる人間ってことになるんだよ．

原田：それってヨーロッパ人のおごりだよ．

丸山：おごりじゃないよ．それはヨーロッパの宿命だよ．もっと気高い文化はあるけど，気高さを維持しようとしても現実社会になじまないんだよ．そうするとヴェーバーの合理化論だよ．

原田：宿命ですか・・・.

【11 月 13 日の回インタビュー】

片山：社会政策としての再分配の問題とソーシャルワークの問題は，他の福祉系の大学の教員と話していても，並列して交わらない．お互い交わろうとしてるんだけど，うまくいかないようです．この問題を結局，何十年もそのまま放置して今に至ってるっていうのが現状だと思いますが，よくないことだと思います.

丸山：そこは日本の社会保障の位置づけが原点から間違ってるんだよ．日本は社会保障と生活保護を分けちゃってるんだよ．一体になっていない．生活保護の公的扶助論と社会福祉事業っていう社会保障の四つの分野のうちの二つと理解してるんだよ．社会保険と医療保険も入っちゃうんだけど．社会福祉事業と公的扶助と公衆衛生の 4 つにわけている．公的扶助論なんだよな．社会政策に労働政策を含まないんだよ．つまらないんだよ．労働がなかったら社会政策なんて言わないよ．それを生活保護一色に社会保障って言ったり公的扶助って言ったり社会福祉と言ったり，それは交わらないよ.

片山：やはりそこに根本的な問題があるわけですね.

丸山：今は苦難が多様化してるからどういうふうに対応していくかっていうことを考えるって事がすごく大事なんじゃないかな．原点に戻ると障がい者は苦難の最たるものだったからね．ヘレンケラー物語とかさ，そこが原点なんだよ．なんで彼らは勉強しなければいけないのか．字を覚えなきゃいけないのかってことは，宗教的な理由じゃないだろ．人間として高貴な生活をしたいとか，そういうふうに思う人たちがいて，それに満足できない人たちがいっぱいいるのに，富の分配だけ考えてどうするんだよ．そこは，社会福祉だといいたいんだよ．社会政策をだめだとは絶対言わないけど，社会政策を中心にしたら，学問なんていらないってことだよ．経済は労働政策だろう．それでいいんだよ．だって今，働いている人の 1/3 から 1/2 ぐらいの人が不安定就業だろ，失業者じゃないわけだろ．ワーキングプアーなわけだよ．そういうものに対してどのように対処するかってことを考えなくて，なにが社会政策って言ってんだってことだよね．失業率を抑えてるからいいとか，何言ってるんだって感じだよ．批判的な精神がない研究者たちがさ，政府の政策に乗ってやってるだけで，それを社会福祉学っていうのかなって思うよ.

片山：社会政策のなかにも，ソーシャルワーク的なものが必要でしょう.

丸山：救済できるかどうかは，経済的なものだけじゃない．苦難というものは．経済は必ずいる

けど，そこはよく分かってるけど，不安定就労者を経済だけで解決できないのにさ，何も解決してないのに何偉そうに言うんだっていう感じだよ．社会福祉に光は一つもあたらないんだよ．ワーキングプアーなんて．生活保護も関係ないし．保険も関係ない．川村もワーキングプアーだけどね？

川村：そうですね．

丸山：そうだろう．保険に入ってないだろ．生活保護は受けられないわな．何一つな．どれだけ就職が不安定で収入が減ろうがさ，ケアする術がないんだよ．今はそこを考えろよっていう感じだよね．

川村：私たち若者は，見捨てられてると理解しています．

丸山：ワーキングプアーを視野にいれないような政策は意味がない．苦難とはなんぞやって考えてないとね．

片山：ライデンですね．苦悩ですね．そこがやっぱり重要ですよね．

原田：ライデンってなに？

片山：パッション（受苦）っていうか．

丸山：今そっちの方を中心にやってるんだよ．ヴェーバーを超えるために．禁欲の精神以外に救いはないんだけど．

原田：人間は欲望だけで生きていけるのじゃないの？

丸山：生きていけるわけないだろう．生きていけないから苦難があるんだろう．

片山：出発点は欲望なんだけど．最近アダムスミスの『道徳感情論』を読んでいたら，文明国の人間は自分の感情を自由に発動できるって．野蛮な国っていうのは，自分を抑制する．自分の欲望っていうのを出さない．それは非文明の国，特に当時はイタリア，フランスっていうのは感情を全部出すという．

丸山：欲望を．

片山：だからそれは市民社会っていう．

丸山：そういうのを嘲るのがヴェーバーなわけよ．勝てないんだよ．勤勉な労働者に．結局．救いがない．

原田：どこに救いがあるの？

丸山：勤勉な労働者はそれが神の意思に基づいて生きているわけだからさ．

原田：天国にいけるかは別にしてね．救いかですか．

丸山：救いのことをやらない限り，社会福祉はないよ．救いがなければ社会福祉でない．

原田：でも救いを与えるのは人間しかないんじゃない？

丸山：たとえばさ，障がい者は何で教育を受けなきゃいけないの？

原田：それは人間だからでしょ．

丸山：いや違うよ．福祉学部でいえば，自己を陶冶しなきゃいけないからっていうんだよ．甘えちゃいかんよって．障がい者だからってなにも全部用意してくれるわけじゃないよ．自分で頑張れってそれが障がい者教育の原点だよ．教わったろ？そうやって．

原田：ほんと？

丸山：教わってるよ．道徳教育論であれ，なんであれそうやって教えるはずなんだよ．

川村：変な平等ですね．

丸山：そう．体系的におかしいんだよ．だから今から変えればいいんだよ．日本福祉大学はそういう性質を持っているのに，なにやってるんだと，強調したい．弁証法だから．生きた弁証法だよ．自分の理念からスカスカになっちゃったやつがさ，もう一回その理念を確かめたいっていうことだよね．見本みたいなもんだよね．

原田：その指摘は，うちの大学だけじゃなくて，日本の学問領域の大半にあてはまるんじゃない

かな．

丸山：だからうちは先にそれを言えばいいんだよ．先に言えば学生募集にも繋がるって言ってるんだけどね．

原田：なるほど．資格だけじゃ来ないよ．

丸山：そうそう．苦難に対処する方法をみんなで考えようとかさあ．

片山：苦悩との向き合い方ですよね．

丸山：そうそうそう．そうだろう？

片山：そうですよ．

丸山：誰でも来るだろ？

片山：それが一番重要だと思いますけどね．そこが抜けちゃってるんですよね．

丸山：人文系がないからだよ．哀れみだよ．経済には，そこがある．社会政策と言わないけど，労働政策とかね．労働経済学とかがある．

原田：でもね，いまの話にはあんまり半分共感できない．自分自身苦悩がないから．苦悩をあんまり感じたことない．他者の苦悩は考えなきゃいけないってことかな．

丸山：パッションっていうのは・・・

片山：コンパッションですよね．

丸山：シンパシーは，苦しみを共有するってことなんだよ．受苦っていうのは，受ける苦しみって言うんだよ．受苦者っていう言葉があるんだけどね．そこを繋げていく，連帯を表明するっていうのが社会福祉だと思う．経済はもうちょっと合理化論だからさ．なんとか手を尽くせば，なんとかなるっていうけど，何ともならねーんだよ．だから，相談相手がいるんだよ．最終的には宗教家的なことも引き受けちゃったわけよ．ソーシャルワーカーって．だから，そういうことを考えればさ，何てバカな議論してるんだと思うんだよね．自分の強みは何か，自分の弱みは何

か，よく分析しろっていってるんだけど，何分析してるんだよ，っていう感じだよ．歴史も弁証法だからさ，弱みの部分もあるけど，同時に強みになる部分もあるんだよ．社会福祉学は，その強みを言い続ければさあ．

原田：逆に言えば今，ものすごくチャンスの時代じゃない？

丸山：そうなんだよ．

原田：新自由主義的な自己責任を唱える学生が多い中で，それを間違ってるよっていうときに，じゃあ何が間違っているかというときに，今日の話をすればいいんじゃないかな．それはうちの刺激的な宣伝になりますね．

丸山：だから何考えているんだって言いたい．駄目だったのはね，政治問題を教授会としての見解を出してたんだよ．たとえば，高齢者パスは正しいか，正しくないかという選択をするとか．一番呆れたのは，空港建設について賛否明らかにするような教授会決議が必要だっていわれたときは，俺はもう本当にひっくり返ったよ．何の意味があるんだ．教授会決定に，社会的な意義はひとつもないよな？日本福祉大学の教授会が，空港建設に賛成って言おうが，反対って言おうがさ．反対しかないけど．社会的に何も意味ないだろ？対内的には賛成意見は述べちゃいけないっていう，抑圧体制の何ものでもないじゃない．なんの意味があるんだ？嫌われる意義しかないよね？社会的に．

片山：よくわからないですね．

丸山：だからそういう風にまで思い上がっちゃってるわけ．なんでも教授会で決定して．政策も決断していけばいいって．つまらない大学だよ．だからその辺で腹立たしく思ってるんだよ．

片山：やっぱり政治化したってことなんですね．

丸山：そうそう．わかってないのよ．人よりちょっと違う感性なんだけど，70年代マルクス主義が終焉したって位置づけなんだよね．当時，すでに，マルクス主義の内部でどれが正しいっていってる段階かって思ってるわけ．うちの大学でも，同じマルクス主義でも社会政策のどっちが正しいかって言い争っていたわけだよ．マルクスの名が穢れるからやめてくれって思うよ．マルクス自身をそんなに尊敬してるわけじゃないんだけどね．マルクス主義っていうものにはさ，可能性を見出しているからさ．70年代に日本福祉大学が政治化して喜んでいるときは，社会的には，マルクス主義の立場を取っている研究者はバカにされつつあったんだよ．

原田：なんで？ 70 年代でしょ？

丸山：70 年代だよ．当時の学会の風潮ってそういうもんだったんだよ．だから僕らは 80 年代から教え始めるんだけど，馬鹿にされないマルクス主義をいかに教えるかってことが重要だったんだよ．馬鹿にされないマルクス主義が何かって言ったら，やっぱりさっきいった苦難の問題なんだよ． 苦難が多様化してるなかで，財の再分配っていう，分配主義なんてどうしようもないんだよ．それに逐一応えていくのがマルクス主義だって，理解してたんだよ．それを理解して欲しいよっていう立場だな．だって，マルクス主義の基本は主と奴の弁証法なんだよ．主と奴の弁証法が流行るのは，自由を求めているときに流行るのね．だけど 70 年代に主と奴っていうのは明確に別れるかどうか，わからなくなってきたんだよ．労働者のつまんなさだけが目立ってくるんだよ．逆にだらしなさっていうか．基本的には労働者っていうのは，自民党支持だろ．信じられないくらい堕落してるじゃないか．自分たちの政党を持たなくてもいいという．堕落以外の何者でもないよな．組織された労働者なんというのは，観念にないからさ，労働者が馬鹿にされる．すなわちマルクス主義の主と奴の弁証法が生きない．生きないっていうことは，マルクス主義は軽蔑されるっていうことなんだよ．

片山：やはり 70 年代から生じてきたことですね？ 80 年代になるとマルクス主義はだめになっていきますね．

丸山：だから 70 年代に分かれ道があるわけだよ．その時の感性だよな．危ないと思わなくてはいけない時に危ないと思っていない馬鹿どもがいたってことだよな．内部で論争している段階かっていうことだよ．どっちが正しいとかさ，俺の意見が正しいとか，なんとかって言ってるような段階じゃなかったんだよ．どちらが現実に有効に発言できるかっていうことだけが問題で，その射程は非常に広くて，ヴェーバーの合理化論を超えるものは何かっていうこと． そこの模索に行くんだよ．結局はそうすると最後は救いだよな．宗教的救いではないよ．現世的な救いは何かってことなんだよ．

片山：90 年代になるとマルクス主義はもう凋落しますよね？そういうなかで，日本福祉大学の教員たちはどうしてたんですか？

丸山：カタツムリのようになっちゃってさ，自分たちの殻に閉じこもって，書籍だけ出版してたんだよ．それも売れない本をね．終わりだよ．頑ななんだよな，その辺．なかには私が一番正しいマルクス主義者だって言ってる教員もいたよ．面と向かって言われたときはガクッときたよ．

片山：本学の教員ですか？

丸山：そうそうそう．自分ほど優れた人間はいないって自慢されてもな．あんたのマルクス主義は最低だよって言いたかったよ．仲間内の議論をして勝った負けたをすることは，すごく嫌われるのにね．当然これには別の考え方もあってね．僕らは基本的に冷戦っていうのは 70 年代に決着はついたと理解してるんだよね．それはソ連がアフガニスタンに侵攻したことによるんだ．泥沼のアフガニスタンにソ連が侵攻して，それを侵攻するように仕向けたのはアメリカだし，ソ連の自壊を待ったという理解なんだよね．

原田：それは正しいんじゃない？

丸山：70 年代なんだよ．だからソ連に味方するやつなんか誰もいなくなるんだよ．そういう意味で．アフガニスタンに侵攻してさ．

片山：オリンピックのボイコットもありましたもんね．

丸山：アメリカは，冷戦に勝ったわけだけど，それは，ソ連が自壊する事を待ったんだよな．僕は当時のモスクワに訪ねたことあるけど，貧しいことこの上なかったよ．目も当てられなかったなあ．モスクワで，しかも観光客に見せるところがさ，ロシア人が貧しくてもう見てられない．靴はボロボロだしさ，服はロクな服着てないし．はあーと思ったよ．これが豊かですって言われたってなあ．

原田：80 年代？ 70 年代？

丸山：80 年代末じゃないなあ．半ばぐらいかな．個別で社会主義は恵まれたところはあるとか，優れたところがあるっていう個別の判断がなぜできるんだって思うよな．相対としてダメなものは，全体としてもダメなんだよ．バカヤローって感じだよね．

原田：私も初めて海外いったのは 85 年．それもソ連にいったけど，あれをみて確かにそんないい生活していないなーって思ったけど，だからといって日本社会が天国だとは思わなかったよ．

丸山：そりゃそうだよ．

丸山：そういう隔絶した高貴な文化でいられる国はないんだよ．そこがわかんなきゃだめよ．仏教って偉いんだけどさ，物欲と無縁な生活をするのが高貴な生活だっていうのはさ，通用しないんだよ，絶対に．維持できなくなるんだよ，自分たちの事情で．王宮なんかみたら王宮は別の生活してるしね．貧しい生活してるわけじゃないんだからね．仏教っていうのは基本的に物欲全部

捨てた文化的生活がいいって言ってるんだけど，支配者はそうでないといけないんだけど，ありえないんだよ．外部から入ろうが入らなかろうが，内部から崩壊するんだよ．それはヴェーバーがいってる．ヴェーバーにね，世界の宗教の経済倫理っていうのがあってね，その中間報告というか，考察っていうのがあってね，それは仏教論なんだよ．仏教というのは世界で一番優れた宗教なんだけど，その世界は物欲から隔絶された社会なんだけど，そんな文化は実現しようがないんだって．実現したと称しても内部で崩壊すると，書いてるんだよ．だから結局，ヴェーバーっていうのは，ヨーロッパ的な合理化しか勝者になれないってことだ．それがマルクスの言葉でいえば，それは最大の疎外なんだよな．それしかないんだから．救いが．勤勉な労働者になる以外，何の道もないって．あのねーって感じ．

原田：それすごい最低だと思うけどね．勤勉になることしか残されてないなんて．キリスト教だったら救いがあるんだろうけど．

丸山：あるだろうけど，そんな救いがあるわけでないだろう．

原田：うん，ない．

丸山：だから，そこが今書かなきゃいけないところなんだよ．今，僕が用意してるのは，ヴェーバーとハイデガーなんだよ．もうほぼ書き上げた．ハイデガーの『存在と時間』を一ページにまとめた．で，ヴェーバーは救いっていうのを，テーマにするのね．宗教の経済倫理ってのにね．それで合理化比較をするわけよ．それぞれの合理化なんだけど．仏教的な合理化っていうのは結局，物欲に無縁な貧しい生活でしかないんだよ，な？高貴な精神なんだけど，守れるはずがない．高貴なんだけど，そんなカリスマが一度登場してきたら，そんな人，簡単に登場しないんだって．カリスマ的支配でこそできるんだ．釈迦はカリスマなの．だから，釈迦がでてきて，一時そういう文化が成立するけれども，それは崩れる．そうすると，また次の新しいカリスマが出てくれば，仏教は復活する．その繰り返しだけど．そのカリスマが出てくる頻度はどんどん落ちるって事だよ．維持できないって言い方をするんだけど．実に言い得て妙じゃない？ちょっとヴェーバーに加担し過ぎかな？

原田：いや，いいと思いますよ．

丸山：だから，ヨーロッパ的合理化っていうのはマルクスで言えばさ，最低の道だからさ． これが幸福に繋がるからな．ね？そこだよ．我々が考えなければいけないのは．片山君，主と奴の弁証法じゃだめ．だめ．

原田：何でなきゃいけないの？

丸山：彼はその復権を考えてるんだよ．

片山：いや，主と奴だけではだめですよね．

丸山：片山くんの哲学は，最後は主と奴の弁証法なんだよ．遅いよ．

原田：何が遅いの？

丸山：気づくのが．自由を求めてってな，そういう自由じゃないんだよ．苦難からの自由なんだよな．精神的な自由っていうのはないんだよね．労働者を見ればわかるんだろ．自民党が大勝したわけだろ．労働者が貢献しなければ勝てないよ．トランプ現象もそうだけどさ．

原田：いや，そうでしょ．一番苦難な人は，その苦難の元凶を生み出す人を支持するんだよ．

丸山：そうそうそう．

原田：ずっとこれ続いてるんじゃない？

丸山：なにが主と奴の弁証法だって言いたくなるよな．

原田：そういう意味でね，なるほど．だけどみんな幸せだと思ってるから，特に日本人は．

丸山：だから困っちゃうんだよなあ．

原田：困っちゃうでしょう．

丸山：困っちゃうよなあ．

原田：物欲だけで生きていけるのかな．

丸山：何が幸せかって聞かれたときに，物欲が満たされる方って答えるやつはいないだろ？じゃあ何なんだっていったら，何も知らず，他と比べてっていうことだけだろ？他と比べるってどこと比べてるんだよ．

片山：でも主と奴の弁証法っていうのは，ヘーゲルの『精神現象学』の中で出てくるんだけど，マルクスがちょっと誤解したんですよ．主が主として自立的であるのは，奴が奴として主のための労働をするからなんですよ．奴が奴であることをやめてしまえば，もう主は主として自立していられない．でも実際には，主でいられる．それは，奴が奴として，主を自分の中で内面化してしまっているからなんですよ．

丸山：うん，それでいいんだよ．

片山：確かに主と奴がひっくり返る可能性もあるとも言えるわけです．

丸山：いや，実用的なのは奴の方じゃん．主は単なる遊び人じゃん．

片山：だから主に奴は内面的に支配されてしまうんですよ．

丸山：支配されるの．主はね．主が奴に支配されるわけ．

片山：いや，ヘーゲルが言っていたのは奴のほうが現実の主を自分の中に自立的存在として内面化しちゃうの．

丸山：そう？内面化っていうのはそういうことよ．実質的なヘゲモニーを握っちゃうっていう．

片山：だから二重の意味があって，確かに主との関わりの中で自分の自立性に気づいていくのだけれども，その主を内面化しているから，主によって支配されるっていう構造そのものを，奴は自分のなかに認めちゃうわけですよ．

丸山：あ，そういう意味か？それを内面化っていうのか？

片山：うん．奴にはそういう側面があるんですよね．もう一つは，先生が言われたような自立する可能性．

丸山：一面化してるわけだな．

片山：二面性があって，マルクスは，先生がいわれた面を，マルクスは引き継いだんですよ．

原田：川村さん分かる．なんだか難しいね．少し整理するとヘーゲルが言ったのは二つある．一

つは主がいる構造を容認してしまう．

片山：そう．奴は支配されるという構造そのものを内面化してしまう．もう一つは自分が自立的である可能性．この二つの矛盾がその後のキリスト教の道徳に，つまり，信仰へとつながっていくんですよ．だから主っていうのが自分のなかにいて自分は奴であり続け，しかし自分の中の主の部分を実現しようとする．

原田：それって，プロテスタンティズムってこと？

片山：ヘーゲルは，中世のキリスト教を念頭に置いていると思うけれど，内面化された絶対的な主である神への信仰を通して，欲望を断念したり喜捨したりしながら，自立的で近代的な主体性となっていくんです．その前段階に，主と奴の弁証法があるわけです．

丸山：簡単にいえば，労働しているのは奴なわけ．主は遊び人なんだよ．社会をどっちが理解できてる？遊んでる人間は社会を何にも理解できないだろう？働いてる人間が社会をどう運営すればいいか分かってるわけよ．そういう意味だろう．労働者っていうのは，最終的には経営権の奪取だって理解してるわけ．こっちは．

原田：その部分をマルクスは使ったというわけですね．

丸山：そうそうそう．俺の主と奴の弁証法でいうと，奴はまず労働組合の役割を，経営者の役割を最後に担うっていうことなんだよ．俺から言わせると．

原田：いなくてもできるでしょってことですよね．

丸山：そうそう．

片山：でももう一方で，奴は，支配―被支配構造そのものを内面化してしまっている．従属したい，という面もあるんです．

原田：確かにそうだよね．今の政治家なんかだれもいなくても大丈夫なんだけど，いないと困るっていうんだよね．みんな．そういうことだよね．変わってやるなんて誰も思わない．なかなか．

丸山：そうか？

原田：ないんじゃない？

丸山：そうかあ．やっぱりヘーゲルは言ってるんかあ．内面化をねえ．ヘーゲルって何者なんだよ．自由なんてどこにあるんだよ．弁証法はどこに行ったんだ？

片山：だからその二面性が対立や矛盾としてぶつかり合うわけですよ．

丸山：ぶつかりあって，なんとかなるって事？

片山：なんとかなるまでは．

丸山：到達しないわけだ．そうかあ．

片山：でも根本的なところはそこがあるっていう．

丸山：そこを理解していないといけないねえ．ちょっと書き直そう．

片山：ところで，ハイデガーって，どのへんに注目してるんですか？

丸山：気遣い．ゾルゲだ．フィアゾルゲ（ドイツ語：他者への気遣い）．

片山：ハイデガーのキーワードでもありますね．それはどういう文脈で？

丸山：時間性の問題なんだけどね．基本的には，人間は必ず死ぬっていう．死ぬのが恐怖だっていうのは現代人にはあんまりないじゃない．突然死がやってくるだけだと思ってる．死に意味を求めてないよね．現代人はね．だけど，ハイデガーは何て言ってるかって言うと，人間は必ず死ぬと思うと現在にある自分は過去の自分は何であったのかを反省するわけね．で，残された時間が未来になるんだわ．で，その残された時間に自由に自分の運命を選択しようとするんだよ．それを気遣って，ゾルゲって言うんだよ．だから過去現在未来っていう線形的なラインとしての時間じゃなくて，過去は自己の反省している存在であり，現在は今ここにいるっていうただそれだけだっていうことで，現在が自分を体験しようとするわけだよ．自分は何であるかってことを．僕みたいな人間が言うべきセリフじゃないんだけど，残された時間っていうのは自由に与えられるって事なんだよ．ハイデガーがいうのは，残された時間が未来なの．そうすると自分を体験することができるんだよ．初めて，そこで．普段みんなは死を意識しないから，目先のこと考えてやっているけど，自分は将来何になるかっていうことを，そのことを考えるようになるっていう

わけね．何々になりたいとか，何々したいっていうこと．どういう自分でありたいかっていうことを考えること自体を，そういう時間からの解放っていう意味もあるんだけど，線形的な時間からね．それを救いっていう．自分の運命を選択できるって言うことと．それがハイデガー哲学の全て．僕から言わせれば．

原田：存在と時間．過去は何なの？

丸山：過去は反省すべきもの．

原田：そんなこと言ったら過去から出てこれないじゃん．

丸山：過去の自分は何であったのかっていうと，それは受け身でしかないわけね．

原田：主体的に何かやるわけじゃないからね．

丸山：主体って言葉は使わないんだけど，何かをやるっていうことを強いられていることはあるけれども，何かしたいからやってきたわけじゃない．それが死を意識した時，残された時間が未来になるんだよ．残された時間に，自分がどういう姿になりたいかっていうことを考えるようになるっていうんだよ．それを投企っていうんだけど，投げる，企てると書いて，日本語でいうとね．あれドイツ語で何て言うんだっけ？

片山：エントヴェルフェン（entwerfen）．名詞だとエントヴルフ（Entwurf）ですね．

丸山：エントヴェルフェンだけでなくて，エントヴェルフェンされた側がする側になるわけだよね．

片山：エントヴェルフェンって，辞書的には輪郭を描くとか，企画するといった意味なんだけど，ハイデガーは字義通りに，エント「離れて」，ヴェルフェン「投げ込む」に分解して，これを「企投」という意味で使っていますね．

丸山：そうそうそう．外に投げ出すんだよな．エントヴェルフェン．そういう夢をもった，描くことができることが，自分が何者であったかっていうことを体験，経験することできるんだよ．結局．達成できたか，できなかったかは別として．自分が何者であったかっていうのが経験できるんだよね．経験するのが人間の在り方なんだよね．アガンベンのことを僕は好きなんだけど，彼はそれすら形而上学っていうんだ．アガンベンの理解は，なかなか到達できてないんだけど．

アガンベンをまだ発見してないんだけど，かつて理解してたつもりでいたんだけど，まだ文章を読み上げるところまできてないんだけど，救いの哲学って定義しているんだ．僕にとっての最初の書なんだ．

原田：『ホモサケル』の作者ですよね．

丸山：そうそう．その前に，ハイデガーなんだよ．ハイデガーを救いの哲学と規定したんだよ．何の根拠も示せずに，救いの哲学っていうからさ，長く疑問に持ってるわけ．もう 30 年以上も前からね．なんであれが救いの哲学なんだって．だからハイデガーを読む時はどの部分が救いの哲学なんだって思いながら読んでるわけ．教養として読んだことはない．そうすると，気遣いというか，ゾルゲにたどり着くわけね．自分のことなんだよ．自分に対する気遣いなんだよ．そう残された時間にまだ自分がやることがあるっていう事が重要なわけよ．残された時間が未来なんだよ．俺なんか切実だよ．ステージ 4 B だろ．残された時間なんて人よりずっと少ないわけだけど，そのなかで自分は何になれるのかってことを考えられるのは非常に自分を体験してるっていうのかなあ．自分がなにであるのかっていうのをな．証明してるって言うのかな．確証してるってのかな．そういう感じになるんだね．

原田：だけど，それは過去がなければできないわけでしょ？

丸山：だから過去の自分が何であったかを，それを含むわけ．だから人間は誕生から死までを初めて体験できるわけ．現在から．アガンベンの一番いいところはね，人間は話す存在ではないってことなんだよ．話せない存在なんだって言ってるんだよ．子どもは生まれた時に話せるやつは一人もいないんだよ．長く話せないんだよ．人間だけだよ．他の動物は話せるんだよ．言語を持ってるわけ．だけど言語をフランス語でいうと，パロールとラングと二つに分裂してしまうのは人間だけなんだよ．

原田：なにそれ？

丸山：パロールっていうのは指し示す言葉．モノだったらこいつは何っていう．それがパロールで，自分の感情も含めて表現する言語活動をラングっていうの．つまり，幼児期とは，話せない存在なわけ．それを自分の中に持ってるんだよ，人間って．話せるようになって初めて大人っていわれるんだよ．

原田：大人になっても話せない人は沢山いますよ．

丸山：だから，形而上学的に人間だけが話せるっていうのは最低なことなんだよ．人間は話せない存在から始まって，そういう過去を必ず持ってるんだよ．その過去を経験したことを，いつ理解するかって言ったらさ，気遣いがなければ理解できないだろうね．そうすると受苦者を考えると，自分の苦しみの具現性はどこにあってということを考えていけることになるわけだよ．基本的に．過去の自分がなんであったかを理解できないと次に自分は何になれるかってことが出てこないんだよ．ただ夢想しているわけではないんだよ．

原田：つながっているわけですからね．

丸山：いや，繋げられるんだよ，自分で．自由に．それが人間の自由であり，救いなんだよ．それがヴェーバーのような救いのない合理化とどう関係してくるかを書くわけよ．

原田：でも何か救いっていう言葉そのものが，宗教的なものだと思いますけど・・・．

丸山：宗教的な救いから始まってるんだよ．宗教的な概念だから救いの概念があるんだけど，それを世俗化しちゃってるわけだよね．いま．その概念が．救いっていうのがいろんなところにありそうだってなっちゃうわけよ．逆にいうと，政治の世界でいえば，他の世界でいえばって．みんな合理化が進むわけね．そうすると結果的には再魔術化っていってもいいんだけど，思ったよりもはるかに多くの神を持つことなんだよ．それぞれの分野で．で，神を崇めているだけ．それを合理化って呼ぶんだよ．再魔術化っていうのと合理化っていうのが最後には一緒になっちゃう．それがヨーロッパ的合理化．

原田：何と何が一緒になっちゃうって？

丸山：合理化と．合理化っていうのは世俗化っていうのは脱魔術化，魔術の世界から離れることでしょ？ところが結果的に神を多く作っちゃうわけだから，再び魔術化しちゃうわけだよ．世界は．それは救いがないんだよ．そこには，神はいっぱいいるけど救いはないの．ただの形式だから．経済で言えば計算可能性っていうのは神だよって．そういう神をもってしまったけど，崇めるわけでもなければ，自分を苦難から救ってくれる存在でもなくて，どうすんだって．

原田：新たな苦難を作り出すよ．

丸山：それをアガンベンは剥き出しの生って言うわけよ．ベンヤミンの言葉だよ．ホモサケル．だから剥き出しの生には救いがない．なにひとつ．だけどそこに救いがあるっていわれると，んーまだよくわかんねえ．アガンベンがいうように剥き出しの生に救いがあるといわれると，

んー．決して自分で書こうとは思わないよな．わけわかんなくなるから，俺はそこを書けない．だからアガンベンについては書けない．でも残された時間っていうのはアガンベンが最初から言ってる言葉でね．愛についてはよくわかるんだよな．アガンベンが言ってる愛はね，相手を批評する段階では消えるんだって．あいつのいいところはこれ．あれとかね．最後まで信じ続けることが愛なんだって．あーそうだよなって．

原田：それは自分の体験が豊かであれば，なるほどと思えるんじゃない？

丸山：内面的な体験で，愛してさえいればいいんだよ．愛というのは．パウロがキリストに対して抱いた，キリストがどういう人であったかって説明できない．信じる人っていう，それしかないんだよ．パウロはね．で，そのパウロの言葉から，今，残された時っていうのを書いてるんだよ．アガンベンは．そうなると本当についていけないんだよなあ．ハイデガーより難しい，アガンベンは．よくわかんない．イタリア語だから本当はアガンベンについて書いた方がいいんだけど．いや，翻訳してる人もわかってないんじゃないかなあ．でもアガンベンがハイデガーをどう評価してるかっていうのはよくわかる．そう僕と同じ境地だと思う．だから可能体っていう言い方をしているけど，潜勢力っていうのはポテンシャルだよな．未来の．なりうる可能性があるわけね．で，それを選択するんだよ，人間は．それを選択しなかったらただ死を待っているだけで何の意味もない．自己を体験して死ねるっていうのが一番救いなんだよ．自分がなんであったかって，考えながらね．

原田：自分がなんであったかというのを考えること？それを考えることができるのが残された時間ですか？残された時間で自分がなんであったかを考えることが自由ということですか？救いということ？

丸山：残された時間っていうのは可能な世界なんだってね．初めて自由になるって．人間はね．自由に選択できるっていう．自由っていうのは制約がないって思うのは間違い．過去があるんだからね．過去の自分があるんだから．そこから離れていけないじゃない．

原田：でもさ，先生のように豊かな過去があればいいけどさ，ない人間にその話をしたら絶望しかないよ．過去という制約がなければ，自由になり得ないでしょう．

丸山：絶望しかないかよ．

原田：誰にでも豊かな過去があるわけじゃないし，それに基づいて未来があるって話になってくるなら，何もなければ何もできないよ．

丸山：だからその時，反省すればいいわけだよなあ？その時間は与えられているんだよなあ？

原田：それは最後の最後での苦難だねえ．

丸山：最後の最後で反省してどうするんだよ．死ぬ瞬間じゃないよ．だから若い時から考えろっていってるの．人間は必ず死ぬんだから．死ぬっていっても川村は 90 歳すぎてからしか死ねないよな．

原田：そんな生きるの？

丸山：川村のとき，平均寿命は 94 歳でしょ？ 94 歳だとして，まだ 60 年っていうのは残された可能性って理解すればかわるよな？重いかあ？自分ができることをやるっていうことだよ．自分をみつめても仕方ないんだよ．自分を見つめることが反省ってよくいうけど，制約があるっていうことだけで，答えをだすっていうものじゃないわけ．答えを出すのは未来について出せばいい．やりきったときに過去についての総括が始まるだけで，反省するってそういう意味じゃないよ．

原田：なるほど．未来に答えを出せばいいのかあ．それが投企ということなのかな？自らを未来に投げ出すとすれば，過去の体験が，どこまで飛ばせるかというか，想像もできない風景をみることができるかどうかに関わってくるということなのかな．もし，そうであるなら，今，やらないといけないことはたくさんある．もちろん，成果物というか，何を達成したかということは一つの体験ではあるけど，そうした成功体験が必要というわけではないと思う．それよりも今，すべきことは答えが出そうもない物事についてとことん考えるというか，迷うことが必要なんだろうね．

【後記：原田】

20 代半ば頃だったと思う．イギリスのフォークストーンからライに向かうバスの 2 階席から田園風景を眺めていると，周りの乗客たちは申し合わせたかのように，1 階へ移動していった．ロンドンのリージェント・ストリートで祖父のために帽子を買おうとしたら，店員に出ていくようにあしらわれた．いわゆる人種差別だったと思う．しかし，腹は立たなかった．むしろ「これが本場の人種差別だ」と，口元に笑みが零れた．差別に苦しみ続ける人びとには大変申し訳ないのだが，高いお金を払ってイギリスに来たかいがあったと嬉しくなった．そして，人種差別の背後には，西洋人の奢りがあると理解し続けていた．本編のなかでも述べたが，ドガの絵にも同様な奢りを感じ取っていた．ところがだ．丸山先生は，奢りではなく宿命だという．宿命という視点から捉え直してみろと．

もはや丸山先生と問答はできない．導く答えが正しいのかどうかも分からないのだが，独りで思考を巡らすしかない．とりあえず，随分と前に聖書に貼るだけ貼っておいた付箋の個所を読み返してみた．そして，ヤコブがヤボク川のほとりで男と格闘を繰り広げ，最後に男から祝福を受け，イスラエルという名を与えられるという物語について考えてみた．

ヤコブの相手である男が神であることは読めばわかる．ただ，何故，神に戦いを挑んだのか見当もつかない．無論，それは神の意志であると理解すればよいのかもしれない．しかし，信仰から距離を置けば，祝福とは神からの承認であると解釈することができる．つまり，旧約聖書を編纂した人びとは，ヤコブを神と戦わせ，人間同士の戦いとは違う次元，まさに高貴な戦いに導き，神から承認された人間へと昇華させた．そして，その血を受け継ぐイスラエルの民の高貴さを証明し，選民思想に正当性を与えようとしたのだろうと理解した．

ただし，ヤコブの血はイエスまで脈々と続いていくが，その先は途絶える．もし，イエスが子孫を残し，その血が続いたとしたら，神の承認は，イスラエルの民だけに与えられたものとなっていただろう．もちろん，今なおイエスを救世主ではなく預言者の一人であると信じる者からみれば，その承認は継続中である．しかし，救世主と信じる者からみれば，イエスの死後の世界において，誰もが神の承認を獲得することが可能となり，誰もがヤコブの末裔を名乗ることが許されることになったと理解できる．つまり，イエスの子孫が存在しない世界では，ヤコブのように命を懸けて戦い，勝利すれば，神の承認が与えられ，それを盾として主人として君臨することができるようになったのだ．逆に負ければ，神から祝福されることなく奴隷のような存在に甘んじなければならない．ただし，イエスのような高貴な人間だけに神の承認が与えられていたら，世の中は奴隷たちで溢れかえってしまうだろう．それゆえ，信仰心を持ち，真面目に働き，質素な生活を送る人びとにも承認が与えられることになる．すなわち，神の承認は，世俗化とともに簡易化していく．同時に，ヤコブの末裔は，神と戦うわけではないが，ヤコブに倣い他者と，あるいは自分自身と戦わなければならない．つまり，戦いは，神の承認を得るための，祝福を受けるための手段となる．そして，ヤコブの末裔を自認する人びとにとって，手段は，やがて宿命として彼らの精神と肉体に浸透していくことになる．

もっとも，高貴さには関係なく世俗化した戦いのなかで，勝者は増えるのだろうが，誰もが勝者となれるわけではない．ただし，敗者にも生きる道はある．徒党を組み主人に戦いを挑み勝利することもあるが，そのようなことがいつも起きるとは限らない．しかし，敗者は，あたかもヤコブの末裔にしがみつくようにして生き永らえる道が用意されてもいる．いわゆる主の内面化である．その方が，簡単に安寧を手にすることができるし，ヤコブの末裔のフリをして，弱者であるとか，見知らぬ人間に戦いを仕掛けて憂さを晴らすこともできる．このような敗者の生き方も，一つの宿命といえるであろう．

以上，宿命という言葉に導かれ，聖書を再考して考えてみた一つの結果である．ただし，東洋人と一緒に 2 階席から田園風景を眺めることを拒絶した人びと，店から追い出そうとした人が，ヤコブの末裔なのか，それを内面化しているのかは分からない．しかも，彼らから戦いを挑まれ

たわけではなく，丸山先生から与えられた宿題の答えとしては，あまりにも貧弱である．「何を言っているんだ．足りない」と叱責されることは間違いない．それゆえ，苦悩はまだまだ続く．さらに，この苦悩に立ち向かうべきかどうかという迷いもある．その源は，ヤコブの末裔として自らを位置付けることはできないからである．もちろん，末裔でないからこそ，冷静に，そして客観的に西洋人の本質を理解することができるという強みはある．丸山先生とは，まさにその強みを体現した研究者だった．それゆえ，追随していくことに，一方では，実に意味のあることだと思うのだが，他方で，ヤコブの末裔ではないという自覚は，東洋人としての自らを奮い立たせる．とくに，中国研究者としては，東洋人の宿命を探し求めてみたくなる．これも丸山先生からのかなり面倒な宿題ではないかと思い始めているのだが，再会までの時間で考え尽くしてみたい．

【後記：片山】

丸山先生は，真の意味で気遣いの人であった．一般的な意味での物や他者への気遣いではない．死の不安を前に，過去の自分を引き受け，将来なんであり得るのかを構想することで，今ここに居合わせている存在として，意味に満ち溢れた事象に関わることができた人であった．丸山先生の生きるエネルギーは自らの死を前にしてさらに高まっていったのは，まさにハイデガーの「死に関わる存在」としての自己を生きたからにほかならないと思う．

丸山先生の話からは，ハイデガーにとどまらず，さまざまな思想家の思想を自らの血と肉とし，身体化してきたことがよくわかる．言葉と思想の幸福な結びつきも，言葉と思想の分離への厳しい抵抗から生まれたものであった．丸山先生は，話の前半部分で，日本福祉大学の変質について語っている．その要点の一つは，人文科学の排除である．人文科学とは，言葉や思想を核としながら価値や価値評価を扱うものである．客観化が困難なため，確かに扱いづらい．しかし，あらゆる科学の基礎に人文科学があるように，福祉が福祉として成り立つ土台を形成するものである．イタリア経済史を専門とする丸山先生が，ハイデガーやアガンベン，あるいはヴェーバーやヘーゲルを語るとき，この基礎にあるものを考えているのである．例えば，2022年の『経済論集』に掲載された未完の論文「ヴェーバーとハイデガー　――脱魔術化の行き着く果ての「再魔術化」からの脱却――」では，「自己への気遣い（Sorge）」そして「他者への気遣い（Fürsorge）」を論じた後，これが社会福祉事業を導くと述べている．

丸山先生は，後半部分の最後の方で，アガンベンを取り上げている．一つは「救いの哲学」として，もう一つは，「剥き出しの生」についてである．「救いの哲学」は，丸山先生にとって最も重要な哲学的テーマであったと思う．そして単なる生である「剥き出しの生」に救いはあるのかを問う．一つの回答はハイデガーに見出せるとしても，ではアガンベンはどうなのか．その意味を最後まで問い続けた．丸山先生が私たちに残してくれた問いは他にもある．あとは私たちがどうそれを継承していくかである．

【後記：川村】

丸山先生との最後の会話は，2021 年 12 月 6 日（月）でした．午前 10 時に丸山先生のご自宅に伺い，ヘルパーさんが来られる 15 時までの約 5 時間，お茶や昼食を楽しみながら，話をうかがいました．内容は，日本福祉大学の歴史，丸山先生自身の研究生活や現在執筆中の 3 本の論文，プライベートの話など多岐に渡りました．ただ，その日の私の主な目的は，行き詰っていた博士論文への助言でした．ところが，丸山先生は，私が専門とする社会学は苦手ということで，「質問に答えられる自信がなくて，聞くのが怖いんだよ」と笑いながら話をそらしていました．それでも，なんとか質問に答えてくれました．

質問は，ネットワークの形成に関することでした．「弱い紐帯」や「強い紐帯」など，形成されているネットワークがどのように影響を与えるのかという研究があるなかで，新しく「生成される，生成する関係」について取り上げることはできるのかという点に関してアドバイスを求めました．私が進めているフィールドワークのなかで登場する人びとの様子を説明した後，丸山先生は，登場人物の関係性がどのようなものとなった時，関係が生成されたとするべきか，あるいは，時間軸を入れながら観察しないと関係が生成されたといえないのではないかなど，1 時間ほどかけてかみ砕いて説明をしてくださいました．

また，丸山先生が執筆されている論文で取り上げられている，ヴェーバーやハイデガーの話もお聞きしまたした．そのなかで私が最も印象に残っているのは，ヴェーバーの救いに関してのお話です．宗教の経済倫理，合理化比較をするという点で，仏教の例えを挙げられ，物欲に無縁な貧しい生活とは，仏教の教えでは，それは高貴な精神であるけれども，釈迦のようなカリスマはそんなに登場をすることがない．そのため，文化は崩れ，再度カリスマの登場を待つしかないという例えを挙げながら，ヨーロッパ的合理化の見直しをすべきなのではないかと自らに問いかけられておりました．中国社会を取り上げ，研究をしている私にとって，ヨーロッパ的な価値観が重視され，それとは異なる価値観についてなかなか述べにくいなと感じているなかで，救われる考えであると思いました．

ただ，現在の私は，丸山先生のお話をほとんど消化しきれておりません．そのため，今後の研究を進めるなかで，メモやボイスレコーダーを聞き返しながら，理解を深めていきたいと思っています．また，丸山先生のインタビューを一つの起点として，勉強会が開催されるようになっているのですが，私も，参加させていただき，文字起こしなどの仕事も与えられています．このような機会が与えられているのも丸山先生のおかげです．